OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	柏木如亭と中國詩學 ： 『詩本草』を中心に
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 105-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70148
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　一〇五―一二〇頁

〔特集〕

柏木如亭と中國詩學

――『詩本草』を中心に

趙　蕊蕊

一　はじめに

江戸後期の漢詩人柏木如亭（一七六三～一八一九）は、江戸新田幕府小普請方（幕府の職名）の大工の家に生まれ、初めの名は謙、字は益夫、號は舒嫮、後に名を昶、字を永日に改めた。そのほか、如亭、瘦竹、晩晴堂、一杖閑客などとも號した。若い頃、長子の身分として家業を繼承するが、寛政六年（一七九四）に職を辭め、詩や畫を賣りながら各地を遊歴する生活を送った。若くして詩才に溢れた如亭は、市河寛齋に「江湖社之翹楚」（『譯注聯珠詩格』序）と評され、生前『木工集』や『如亭山人稿初集』（以下『初集』と略稱）を出版した。文政二年（一八一九）、如亭は水腫病を患って死を覺悟し、晩年の作品や既刊未収の詩を友人梁川星巖に託し、七月京都にて亡くなった。文政五年（一八二二）、梁川星巖は如亭の遺稿を『如亭山人遺稿』（以下『遺稿』と略稱）と『詩本草』を編集して刊行した。

如亭の『詩本草』は、梁川星巖に「爲山人最愜心之筆（山人の最も心に愜う筆爲り）」（『詩本草』後記）と評されている。本書は、各地遊歴と美食を題材にして、詩論・作詩の技術を具體的に論じた一種の「詩話」に類する随筆と言えよう。如亭の食生活と詩學觀念を表す著作であり、「口腹の文學」[注1]とも評價されている。柏木如亭と『詩本草』については、新谷雅樹氏、新稲法子氏などに既に論考がある[注2]。本稿では、これらの先行研

究を踏まえ、如亭の漢詩の特徴に著目し、『詩本草』の發言に卽して、中國の詩歌や詩學の受容の一端を明らかにしたい。

二　柏木如亭とその漢詩

（一）如亭という漢詩人

如亭については、葛西因是が「柏山人碑」（東京日暮里の養福寺に現存）に次のように述べている。

> 噉啖狹斜、魚肉非嚼大塊不飽。風月之遊、老不減少壯。衣服斬新、務逐時世。雖不嗜酒、好與嫖客歌娼混坐、時時作戲劇打諢之語。蓋色食成性、天眞爛漫、人亦無以是疵山人。
>
> 狹斜〔妓楼〕に噉啖し、魚肉は大塊を嚼むに非ざれば飽かず。風月の遊、老いて少壯に減（ゆず）らず。衣服は斬新にして、務めて時世を逐う。酒を嗜まざると雖も、好みて嫖客歌娼と混坐し、時時戲劇打諢の語を作す。蓋し色食は性と成り、天眞爛漫、人も亦た是れを以て山人を疵（そし）る無し。

如亭は美食を好み、「色食は性と成り、天眞爛漫」と評されている。鮮やかな個性を持つ奔放な文人と言えよう。若い頃は花柳街に遊び、頽廢した生活を過ごしており、同時代の大窪詩佛「題柏永日肖像」には「長爲風月主、世事謝紛紛（長く風月の主と爲り、世事　紛紛たるを謝す）」（注3）と評されている。

天眞爛漫な性格の如亭は、儒家を輕視し、精神の自由を重んじていた。『詩本草』の村瀨藤城の跋には、次のように述べられる。

> 山人常下視世儒、不翅草芥。
>
> 山人　常に世儒を下視す、翅だ草芥のごとくするのみならず。

また、如亭は俗儒を輕視し、更に官職を求めることにも執心しなかった。彼自身「還京城寓所」（『遺稿』巻一）に

> 老夫不是求官者　老夫　是れ求官者たらず
> 祇愛平安城外花　祇だ愛す　平安城外の花

と述べている。梁川星巖「過如亭山人埋骨處、瀟然成長句」にも、如亭について

> 平安城外春如海　平安城外　春は海の如し
> 只愛鶯花不要官　只だ鶯花を愛して官を要めず（注4）

という句がある。また、賴山陽は如亭を「一落魄羈人」（『遺稿』序文）と呼び、それに續けて次のように述べている。

> 山人棄官削髮、隻影千里、如雲水僧。而服必時

様、風流自喜、如遊冶少年。喜罵座、食時新不論錢、如俠客。而飲不任蕉葉、几研整齋、性短視、錄詩必用細楷、如謹敕書生。

山人　官を棄てて削髪す、隻影千里、雲水僧の如し。而して服するは必ず時様たり、風流にして自ら喜ぶこと遊冶の少年の如し。座を罵るを喜び、時新を食らうに銭を論ぜず、俠客の如し。而して飲めば蕉葉に任えず。几研は整齋、性は短視、詩を錄するに必ず細楷を用うるは、謹敕の書生の如し。

賴山陽は如亭の奔放な個性を「雲水僧」、「遊冶少年」、「俠客」に、そして詩歌創作の態度を「謹敕書生」に喩えている。彼の作詩に恥る姿は、「除夜」（『初集』）にも表れている。

囊中句**滿**又新春　囊中に句**滿**ちて又た新春
追得唐賢舊苦辛　追い得たり　唐賢の舊苦辛
擬取一年吟詠卷　一年の吟詠の卷を取りて
亦供薄酒祭詩神　亦だ薄酒を供えて詩神を祭らん
と擬す

「囊中句」は、中唐の李賀が詩を作ったそばから錦の囊に投げ込んだ故事を踏まえたものである(注5)。最後の二句では、年末に一年の間に作った詩を取り出し、薄い酒を備えて神様に献上すると言っている。李賀と同時代の賈島は除夜に酒と干し肉を捧げて、詩を祭っている(注6)。ここで、如亭は賈島の故事を踏まえ、自らの作詩する様を苦吟する唐代の詩人になぞらえている。友人であった高岡秀成は、如亭の作詩に恥る姿を「苦吟構思、百錬千鍛、一字不苟、豈徒五字捻斷數莖鬚哉（苦吟構思、百錬千鍛、一字も苟にせず、豈に徒らに五字　數莖の鬚を捻斷せんや）」（『木工集』序文）と評している。

では、このように苦吟して詩句を練り、作詩に没頭した如亭の漢詩は、どのような風格を有しているのだろうか。

（二）如亭の漢詩の風格

若い時、如亭は市河寬齋が創設した江湖詩社に參加し、寬齋に師事して漢詩を學んだ。如亭と市河寬齋、大窪詩佛、菊池五山は、江湖社の四家と呼ばれる。彼らの漢詩の創作は、清の袁枚の「性靈説」(注7)の影響を強く受け、個性を強調して清新の詩を尊重した。これについて、大窪詩佛は以下のように述べている。

河寬先生開江湖社、首唱白香山、而李王模擬之風爲之一變。清袁簡齋先生作『隨園詩話』、專唱清新之詩、痛斥七子之風。推年考之、其時正相當。非事之不謀而相類者乎。

河寛先生江湖社を開き、白香山（白居易）を首唱す、而して李王（李攀龍・王世貞）の模擬の風之れが爲に一變す。清の袁簡齋先生（袁枚）『隨園詩話』を作り、專ら清新の詩を唱え、七子の風を痛斥す。年を推して之れを考するに、其の時正に相當す。事の謀らずして相類するに非ざるか(注8)。

「江湖詩社」の名前からみると、市河寛齋などの漢詩人は意識して南宋末の「江湖詩人」を模倣しようとしたのであろう。この詩社における漢詩人は主に市井の人であり、政治、仕官に關心を持たず、創作した漢詩も政治との關係は稀薄である。

この詩社に属した如亭が創作した漢詩は、やはり性靈の詩風の影響を受け(注9)、自由かつ開放的な態度で清新、新奇なる詩を追求した。賴山陽「論詩絶句二十七首」其の二十三は、如亭の漢詩を以下のように評している。

柏祠爲詩有別才　柏祠　詩を爲るに別才有り
空腸直吐性靈來　空腸　直ちに性靈を吐き來る(注10)

擬古尊經の思想に縛られなかった如亭は、純粋な精神を以て漢詩を作った。特に若い頃には多くの艶情詩を作った。『詩本草』第四〇段「吉原詞」には次のような話がある。

余少時嘗墮在酒海肴山於北里之中、作吉原詞三十首。頗爲同臭所賞、後不復作此種詩。

余　少き時嘗て墮ちて酒海肴山に在り、北里の中に於いて吉原詞三十首を作る。頗る同臭の賞する所と爲る、後に復た此の種の詩を作らず。

如亭の詩集には、「宮詞」、「歡宵」、「別後」、「晏起」など風月（色ごと）に關する詩作が多く見られる。この類の詩は日中を問わずあまり漢詩の題材に取りあげられるものではないであろう。右の資料には、「吉原詞」を作ったことを後悔し、後にその類の漢詩を作らなかったと述べている。

「吉原詞」のような作品のほか、如亭は身邊の瑣事や細部を觀察し、「田家分韻」、「秋日田家」、「夏日幽居」などの地方の風俗や田園の風景に關する漢詩も多く作っている。これらの漢詩について、高岡秀成は『木工集』の序文に次のように述べている。

永日初受規則於寛齋河先生。河先生者、首唱白氏風於世、其徒日衆。永日既得其法、而稍變之。雜以宋諸名家、最喜楊誠齋、方秋崖體。其述情賦景、巧入纖密、而其用心、在於熔鐵成金。凡殊俗異風、細言小事。人以爲不可入華語者、悉收拾來做詩料。

永日初め規則を寛齋河先生に受く。河先生は、白氏の風を世に首唱し、其の徒日に衆し。永日　既に

其の法を得、而して稍之れを變ず。雜うるに宋の諸名家を以てし、最も楊誠齋（楊萬里）、方秋崖（方岳）の體を喜ぶ。其の情を述べ景を賦すに、巧みに纖密に入り、而るに其の用心、熔鐵成金に在り。凡そ殊俗異風、小事を細言す。人　以て華語に入るべからずと爲す者、悉く收拾し来たりて詩料と做す。

寛齋が唱えた「白氏之風」は、白居易の通俗な詩風である。白氏の影響を受けた如亭は、後には「楊誠齋、方秋崖體」、南宋の楊萬里や方岳の詩風、卽ち自然における萬物を好んで詠い、性情を重視し、童心を理想とする詩風を重んずるようになったという。ここに言われるように、如亭はそれまで漢詩に詠われなかったものを、積極的に詩の材料にしている。彼の「題畫」十二首（『遺稿』巻二）其四にも

身外皆詩料　身外　皆詩料
秋林獻好箋　秋林　好箋を獻ず

という句がある。如亭は楊萬里らの詩を模倣し、細事や小動物など様々な物を詠じている。「中野草堂」（『初集』）に

蝸涎現篆朝暾壁　蝸涎　篆を現す　朝暾の壁
蛛網留珠夜雨墻　蛛網　珠を留む　夜雨の墻

という句がある。茅屋を詠じるなか、そこに住む蝸や蛛などの振る舞いに意を払っている。このような微細な觀察や描寫は宋詩の風格とよく似通っている。

如亭の漢詩を通覽するに、近くは明清の詩に、遠くは唐宋の詩に學んだことが分かる。では、如亭自身は詩を作ることをどのように捉えていたのだろうか。以下、『詩本草』の發言を見ていきながら、如亭の示す作詩のあり方を檢討したい。

三　『詩本草』における飲食を詠じる詩

現存の『詩本草』は四十八段落からなり、飲食に關連する名品、物語、料理方法、養生知識などが記される。そこには、飲食に關する事柄を詠じた詩も多く含まれている。

まず、『詩本草』第七段「蕎麥」に見える、信濃（現長野縣）の蕎麥について記した一節を讀んでみよう。

蕎麥以信濃爲第一、其香味非他州可及也。嘗讀書于墨坂大夫後園、廚下頻頻供之。因作「蕎麥歌」、云「江都人世極樂國、口腹何求不可得。時新魚菜尚奢靡、燕席爭供如奉勅。昇平士女不知愁、食前方丈擬公侯。信山蕎麥無物敵、相魚駿茄遜百籌」。

蕎麥は信濃を以て第一と爲す、其の香味　他州の

及ぶべきに非ざるなり。嘗て書を墨坂大夫の後園に讀み、厨下頻頻として之れを供す。因て「蕎麥歌」を作る、云く「江都　人世の極樂國、口腹何か求めて得べからざる。時新の魚菜　奢靡を尚び、燕席爭いて供すること勒を奉ずるが如し。昇平の士女　愁を知らず、食前　方丈　公侯に擬す。信山の蕎麥物の敵する無し、相魚　駿茄　百籌を遜る」。

文化三年（一八〇六）、如亭は墨坂（現長野須坂市）で駒澤清泉のところに泊まっていた。「蕎麥歌」は『初集』（注11）に收められ、初めに江都（現東京）における飲食の奢靡の風を述べ、最後に「相魚」（相模魚）、「駿茄」（駿河茄）という美味ですら信濃の蕎麥に及ばないことを述べている。このように飲食は、如亭の日常生活を彩るだけでなく、地方の風土を賛美する文脈でも詠まれていた。

同じく信濃の「菘」について、『詩本草』第八段の「蔬菜」に次のように述べている。

信濃積雪中所挑之菘、勝於吾**鄉**春時之鶯菜者。范石湖所謂「撥雪挑來躅地菘」也。……此風味實與朱門肉食者難言。便題一絶于寓居之壁、云「霜落山村樹欲空、朝寒煮菜坐爐紅。紺珠已摘殘茄盡、一尺琅玕剪早葱」。

信濃の積雪の中に挑ぐる所の菘、吾が**鄉**の春時の鶯菜なる者に勝れり。范石湖が所謂（いわゆる）「雪を撥して挑げ來る躅地の菘」なり。……此の風味　實に朱門肉食の者に言い難し。便ち一絶を寓居の壁に題して、云く「霜落ちて山村　樹空しからんと欲す、朝寒菜を煮て爐紅に坐す。紺珠已に殘茄を摘み盡くし、一尺の琅玕　早葱を剪る」。

ここで如亭が擧げる范成大（號は石湖）は、楊萬里、陸游と同じく江戸後期における漢詩人たちに大きな影響を與えた南宋の詩人である。彼らの詩は、身近にある細かい事柄を叙述し、風土を記錄する特徴があり、詩で「日記」を書くようなものと言ってよいだろう。

このような地方の名物について記した發言は『詩本草』に散見される。例えば、第十六段「大刀魚」に

東海有大刀魚、卽閩中帶魚也。春夏之交、味頗美。余好啖之。然人家賤視弗屑供客。往年喫道傍小店。醉後戲書小詩與店小二。**吶**喊聲銷天日麗、波濤海靜太平初。折刀百萬沈沙去、一夜東風盡作魚。

東海に大刀魚有り。卽ち閩中の帶魚なり。春夏の交、味は頗る美なり。余好みて之れを啖う。然れども人家賤視して客に供するを屑しとせず。往年、道傍の小店に喫す。醉後戲れに小詩を書して店小二に與う。**吶**喊　聲銷えて天日麗し、波濤　海靜かな

り太平の初。折刀百萬　沙に沈み去り、一夜東風盡く魚と作る。

「大刀魚」は「鱔」の俗名であり、美味ではあるが、客に出すのははばかられるような魚である。酒に醉った如亭は戯れに「大刀魚」を歌い、その詩を「店小二（小僧）」に與えた。第三句は杜牧「赤壁」の「折戟沈沙鐵未銷、自將磨洗認前朝（折戟　沙に沈みて鐵未だ銷えず、自ら磨洗を將て前朝を認む）」[注12]の句を踏まえたものである。如亭は歴史の**吶**喊の聲、激しい戰争の場面と、現在の海静かな太平な時代とを對比して描寫する。そこには折れた刀が「大刀魚」となったという新奇な發想からなる表現が用いられている。

そのほか、如亭は飲食を歌う時、しばしば遊歴の憂いや、美食を食べての喜びを表している。例えば、『詩本草』の第十七段「鰹」に

東海舊蕩風吹綠、上店時新斫赤玉。正是江都清和天、此時口饞遂所欲。去年四月在北方、越海到處不可嘗。今日關外一咀嚼、大勝夜夢向家**鄉**。此余在駿河桑苧堂處、食松魚而所作也。……余栖栖他**鄉**、忘此味久矣。而卒然食之於三百里外。則不免走筆作詩、亦坡公志喜之意也。

東海の舊蕩　風　綠を吹き、店に上る時新　赤玉を斫る。正に是れ　江都清和の天、此の時口饞かに欲する所を遂ぐ。去年の四月北方に在り、越海到る處　嘗むべからず。今日　關外に一たび咀嚼するは、大いに勝る夜家**鄉**に向かうを夢むに。此れ余駿河の桑苧堂の處に在り、松魚を食らいて作る所なり。……余　他**鄉**に栖栖として、此の味を忘るること久し。而して卒然　之れを三百里の外に食う。則ち筆を走らせ詩を作るを免れざるも、亦た坡公喜びを志すの意なり。

右に擧げた詩は文化四年（一八〇七）、如亭の駿河の桑原苧堂の家での作であり、『遺稿』に收められる。最後の四句には、他**鄉**で久しぶりに美味なる松魚を食する感慨を述べている。「坡公」とは宋代の美食家であった蘇軾を指している。「志喜之意」については、蘇軾「喜雨亭記」に「亭以雨名、志喜也。古者有喜、則以名物、示不忘也（亭を雨を以て名づくるは、喜びを志す。古は喜び有れば、則ち以て物を名づく、忘れざることを示すなり）」[注13]と書いている。如亭は蘇軾の故事を踏まえて、異**鄉**で松魚を食べた喜びを忘れぬようにと、詩を作って記錄したのである。

右の詩のように飲食と故**鄉**を密接に結びつけるのは、彼の漢詩にしばしば見える。例えば、「吉備雜題」十四

首の其六（『遺稿』巻一）に

　枵腹無愁客那妨　枵腹にして愁無く　客那ぞ妨げん

　睡餘飽飯卽吾**鄉**　睡餘　飯に飽けば卽ち吾が**鄉**なり

「示立人弟」（『遺稿』巻二）に

　到處隨緣歲月長　到る處緣に隨いて歲月長し

　江山寫賣代農桑　江山　寫し賣りて農桑に代う

　人生一世誰非客　人生一世　誰か客に非ざらん

　遇著雞豬便故**鄉**　雞豬に遇著すれば便ち故**鄉**

という詩句がある。これらの詩句には、如亭の飲食にこだわる性格や客寓の思いがよく表現されている。一生漂泊をつづけた如亭にとって、飲食は故**鄉**に對する思いを慰め、現實の痛苦や憂愁を忘れられるものであったと言えよう。

さて、以上に述べた點にも增して注目すべきは、如亭が様々な飲食を用いて、彼自身の詩學理念を表していることである。以下、『詩本草』ほかの發言に卽して、如亭における飲食と詩學との關係について考察してみよう。

四　『詩本草』における中國詩學の受容

如亭は『詩本草』引の冒頭に「余性嗜味甚、而嗜詩更甚於嗜味矣（余が性　味を嗜むこと甚だし、而して詩を嗜むこと更に味を嗜むことより甚だし）」と述べている。美食よりさらに詩を嗜み、美食家かつ詩人として、この本を創作したことが表明されている。本章では、「詩病」「以俗爲雅」「以食喩詩」、これら三つの角度から、『詩本草』における中國詩學の受容について檢討したい。

（一）「詩病」

『詩本草』の書名について、如亭は「客有戲以余爲詩中時珍者。輒呼酒落之、名曰『詩本草』（客の戲れて余を以て詩中の時珍と爲す者有り。輒ち酒を呼びて之れを落し、名づけて『詩本草』と曰う）」と書いている。「時珍」とは本草學者李時珍を指す。『詩本草』は本草學、すなわち一種の醫學の影響を受けていることが分かる[注14]。實際、如亭は醫者のように詩の病を見抜き、治療の方法も提示している。例えば、『詩本草』第三十六段の「詩法」に次のように述べる。

其詩非不佳、可惜不免支離病。夫作詩不免支離

病、雖日累數百首、終身不得稱詩人也。……吾且贈以一片婆心之言。自今自後、杜門焚香、取唐宋名家諸作平心熟讀、則悟入可計日而待矣。

（吾邦近世の詩人）其の詩　佳ならざるに非ず、支離の病を免れざるを惜しむべし。夫れ詩を作りて支離の病を免れざるは、日に數百首を累ぬと雖も、終身詩人と稱するを得ざるなり。……吾且く贈るに一片婆心の言を以てす。自今自後、門を杜じ香を焚き、唐宋名家の諸作を取りて平心に熟讀せば、則ち悟入日を計えて待つべし。

ここで如亭は、近世の漢詩人たちが作った詩の「支離病」（ばらばらでちぐはぐな病）に對する「唐宋名家の諸作を取りて平心に熟讀す」という對策を提出している。

そのほか、『詩本草』第三十七段の「市俗之氣」には、詩の「俗氣」を治す独特な見解もある。

市俗之氣尤爲難醫、屠赤水嘗於畫箋中辨之。畫尚然、況詩乎。近世詩人多犯此病。我有一方、不必揀唐宋元明、偏取彼方人詩卷清新者、杜門朗誦一二月、卽愈。服之有法、不可必貪多。其中遇氣力骨格似我所爲者、則不憚一首千讀、必盡其字法、句法、章法、篇法而後止。此是如亭山人經驗家方、降詩人胸閒俗習氣之良劑也。

市俗の氣　尤も醫し難しと爲す、屠赤水嘗て畫箋の中に之れを辨ず。畫すら尚然り、況んや詩をや。近世の詩人多く此の病を犯す。我一方有り、必ずしも唐宋元明を揀ばず、偏に彼方の人の詩卷の清新なる者を取り、門を杜じて朗誦すること一二月、卽ち愈ゆ。之れを服するに法有り、必ずしも多きを貪るべからず。其の中　氣力骨格の我が爲す所に似たる者に遇えば、則ち一首千讀を憚らず、必ず其の字法、句法、章法、篇法を盡くして後に止む。此れ是れ如亭山人が經驗家方にして、詩人胸閒の俗習の氣を降すの良劑なり。

「彼方」（中國）における詩人の清新な詩作を選んで熟讀し、さらに「氣力骨格」が似ている詩人の字法、句法、章法、篇法に精通することで、俗氣を治すことができると述べている。「屠赤水嘗於畫箋中辨之」とあるが、明の屠龍（号赤水）が書畫を論じた『考盤餘事』の「畫箋」には「市俗の氣」についての記事がなく、如亭の記憶違いであるようだ(注15)。「市俗の氣」を去ることや「熟讀」については、實は屠龍よりも古くは北宋の詩人を代表する蘇軾に論じられていた(注16)。如亭の以上の發言は蘇軾の影響を受けていると言えよう。

右に擧げた二つの發言には、如亭の、一字一句から一篇全體までに通ずる作詩の學習法が示されている。彼は「清新」なる名詩を「熟讀」することで詩の構造に熟達すべきであり、多く作り多く讀むことが必ずしも上達の近道ではないと考えている。

(二)「以俗爲雅」

前章に述べたように如亭は俗なる飲食を高雅なる詩歌の題材として用いた。こうした創作方法は「以俗爲雅」と評してもよいだろう。「以俗爲雅」は、北宋を代表する詩人梅堯臣、蘇軾、黄庭堅などについてしばしば論じられてきたように、宋代の詩の創作方法において極めて重要な位置を占めている(注17)。この方法は、具體的には二つに分けて捉えられる。一つは俗事、俗物などを詩歌の題材として用いること、もう一つは俗語、方言を詩歌に用いることである。

如亭は飲食を題材として詠う場合、飲食物に關する俗名、俗諺を用いて詩を作ることもあった。これもまた「以俗爲雅」の典型的な例と言えよう。例えば、第十三段の「鯛」には、吉備の金山鯛魚を以下のように詠っている。

余嘗作「備中雜題」、其中二首云「遠趁時新亦一奇、賞春燕上減**鄉**思。初肥棘鬣如紅錦、正是櫻花欲放時」。「錦樣佳魚堪斫膾、不妨一見取囊傾。爲湯來喫骨邊肉、幽味多於睡五更」。「骨邊肉、五更睡、雖不多、最有味」。是語出於周公謹『浩然齋雅談』。不知古人所嗜骨邊肉、果指鯛魚耶。

余嘗て「備中雜題」を作り、其の中の二首に云く「遠く時新を趁いて亦た一奇、春を賞する燕上　**鄉**思を減ず。初めて肥ゆる棘鬣　紅錦の如し、正に是れ櫻花放(ひら)かんと欲する時」。「錦樣の佳魚　膾に斫るに堪え、一見　囊を取りて傾くるを妨げず。湯と爲り來りて骨邊の肉を喫らい、幽味　五更の睡よりも多し」。「骨邊の肉、五更の睡、多からざると雖も、最も味有り」。是の語　周公謹が『浩然齋雅談』に出る。知らず　古人嗜む所の骨邊の肉、果して鯛魚を指すか。

右の資料に擧げた詩は、『遺稿』巻一に收める「吉備雜題」の第二首と第三首である。この二首は、主に櫻が咲いた時の鯛の美味を述べている。最後の二句は、周密(字は公謹)の『浩然齋雅談』に記された諺を踏まえて、鯛の「骨邊の肉」の味が「五更の睡」と同じく好ましいと述べており、如亭の食の嗜好がよく表れている。

そのほか、如亭には「諧謔竟日」(『初集』序文、高岡

秀成語）という性格が備わっており、その漢詩には諧謔的な言葉がよく見られる。ここにもまた「以俗爲雅」の典型的な表れを見ることができよう。例えば、『詩本草』第三十五段の「桃の實と桑の實」には、以下の話がある。

一小店中盤盛金桃數顆。大如飯椀。余乍見涎流、卽叫僕買二顆。行喫輿中。剖之肉色紅紫、嚼之靈液溢吻。終日不復思餐飯矣、其香味未能忘。噫。知得前生事、仙桃又來攫。若非孫悟空、卽是東方朔。那時戲哦此詩。

一小店の中に盤に金桃數顆を盛る。大なるは飯椀の如し。余乍ち見て涎流す、卽ち僕を叫びて二顆を買はしむ。行きて輿中に喫う。之れを剖けば肉色紅紫、之れを嚼めば靈液吻に溢る。終日復た餐飯を思わず、其の香味未だ忘るること能わず。噫。知り得たり前生の事、仙桃又た來たり攫う。若し孫悟空に非ざれば、卽ち是れ東方朔。那の時　戲れに此の詩を哦す。

最後の「戲れに哦す」という言葉に、如亭の「諧謔」はよく表われている。右の資料に擧げた漢詩は如亭の詩集に収められておらず、おそらくは刪除されたのであろう[注18]。なお、ここで如亭は桃を嗜んだ自分を、孫悟空と東方朔に喩えている。このように傳説上・歴史上の人物が桃を好んだ俗事を漢詩に引き入れ、新奇な効果をもたらした漢詩は、江戸後期詩壇における「性靈説」を提唱した漢詩人の新たな雅俗觀を表したと言えるだろう。

（三）「以食喩詩」

「色食は性と成り」と評され如亭は、獨特の審美眼によって飲食を論じていた。例えば、『詩本草』第三十一段の「魚の塩漬け」には、塩漬けにした魚の味の違いを、嬌妻、艷妾、俊婢、名妓、千金小姐に例えている[注19]。さらに第四十三段の「水族」には、如亭が明清小説における登場人物の書き方を模倣し、様々な水産品をきらびやかな服飾の人物に喩えている[注20]。彼の筆によって、これらの飲食物は審美的な對象に姿を變えたと言えよう。

また、如亭は飲食を詩歌に喩えて論じていた。清代の袁枚は宋代に盛んになるこの手法を「以食喩詩」[注21]と稱している。この批評方法は、宋代以降、元、明、清を通じて大きな影響を與えただけでなく、日本の漢詩批評の領域にも導入された。では、日本の漢詩人たちは「以食喩詩」をどのように表現したのか。以下、『詩本草』を中心として如亭の發言を取り上げて分析してみたい。

まず、『詩本草』第四段の「酒茶與詩文」を讀んでみよう。

河南文文平者參州人也、余嘗有序於其詩集。今追錄以供一噱、云「恒看世人作詩、多失於粗。一題到手、乃湊字爲句、湊句爲聯、草草了事。令人一讀氣盡」。余嘗謂、詩與文猶酒與飯。食飯、作文人閒第一喫緊事也。何可一日無此。已不可一日無此、則人人依分不必揀精。飲酒、作詩優遊行樂時也。似是非不可一日無此、已非不可一日無此、則人人依分不得不揀精。但是人人飲酒便知揀精、人人作詩或不知揀精。何者、不知求題意而求之題面、不知求虛字而求之實字、不知求篇法而求之句法、所以其爲粗。此卷參河河南文平家釀也。雖味薄亦足以醉人矣。

河南文文平は參州の人、余嘗て其の詩集に序する有り。今追錄して以て一噱に供す、云く「恒に世人が詩を作るを看るに、粗に失する多し。一題手に到れば、乃ち字を湊めて句と爲し、句を湊めて聯と爲し、草草として事を了る。人をして一讀して氣盡きしむ」。余嘗て謂う、詩と文とは猶酒と飯との如し。飯を食らいて、文を作るは人閒の第一喫緊の事なり。何ぞ一日も此れ無かるべけんや。已に一日も此れ無かるべからざれば、則ち人人分に依りて必ずしも精を揀ばず。酒を飲み、詩を作るは優遊行樂の時なり。是れ一日も此れ無かるべからざるに非ざるに似たり、已に一日も此れ無かるべからざるに非ざれば、則ち人人分に依って精を揀まざることを得ず。但だ是れ人人　酒を飲むは便ち精を揀むことを知り、人人　詩を作るは或いは精を揀むことを知らず。何となれば、題意に求むるを知らずして之れを題面に求め、虛字に求むるを知らずして之れを實字に求め、篇法に求むるを知らずして之れを句法に求む、其れ粗と爲る所以なり。此の卷は參河の河南文平の家釀なり。味薄しと雖も亦た以て人を醉はしむるに足れり」。

如亭は詩歌と文章をそれぞれ「酒」と「飯」に喩え、飯を食らうことと文章を書くことは人間の一番重要な事であるが、それに對して、飲酒と作詩は「優遊行樂」の事であるとしている。さらに彼は、人々は美酒を追求するが、佳い詩は追求せず、「湊字爲句」、「湊句爲聯」、「一讀氣盡」の詩や「題面」、「實字」、「句法」を求める粗雜な詩を書いているとして批判する。右に擧げた資料の最後の部分で注目されるのは、河南文平（一七八五～一八四七）の詩歌を褒め稱えていることである。ここで如亭は河南氏が作った漢詩を彼の家で釀造された酒に喩え、

さらに、家醸の「味」は薄いけれども、人をうっとりとさせる功能を持つと述べている。

詩歌を美酒に喩えた例は、宋代の作品によく見られる。例えば、蘇軾の「又一首答二猶子與王郎見和」に

老夫作詩殊少味　老夫　詩を作りて殊に味少なし
愛此三篇如酒美　愛す此の三篇　酒の如く美なるを[注22]

とあり、王郎の詩を美味なる酒に喩えている。また、晁補之「感寓十首、次韻和黄著作魯直、以『將窮山海迹、勝絕賞心晤』爲韻」其六に

清詩如玄酒　清詩　玄酒の如し
胡乃淡而永　胡ぞ乃ち淡にして永からん[注23]

とあり、黄庭堅が作った清詩を玄酒に喩えている。ここで注意したいのは、宋代の詩人たちが詩味の薄さを肯定的に捉えていることである。特に蘇軾が「發纖穠於簡古、寄至味於澹泊（纖穠を簡古に發し、至味を澹泊に寄す）」[注24]という「至味」説を提出したことにより、この説は更に流行し、それに従って平淡な詩風も盛んになっていった。如亭が文平の詩を薄い酒に喩えたのは、宋代における「以酒喩詩」や平淡な詩風の流行の影響を受けていると言ってよいだろう。

そのほか、『詩本草』第四十七段の「果蓏」には荔枝、梨、柿、柑、葡萄、西瓜、甜瓜、栗、楊梅、蘋果などに關する詩をあげた後、以下のように述べている。

果蓏可嘗者僅止於此。餘種雖多、不復足供山人詩嚼也。

果蓏の嘗むべき者は僅かに此れに止まる。餘種多しと雖も、復た山人の詩嚼に供するに足らざるなり。

ここで如亭は、これらの果物を除いて、ほかの果物は詩の題材としては不十分であると指摘している。「詩嚼」（果物を食して詩の材料にする）という言葉は極めて斬新で、果物を詩のなかに詠じ入れ、詩人の咀嚼に供する意であろう。「嚼」という動作はもともと攝食の動作であるが、ここでは詩を吟味する動作として使われている。つまり、詩人は果物を食するように詩歌を味わうのである。

次に擧げる「早春休日」（『木工集』）の一節にも「以食喩詩」の方法は明確に表れている。

欠錢無酒呼春色　錢を欠き酒無くして春色を呼び
吟味詩歌當點心　詩歌を吟味して點心に當つ

詩歌を吟味する經験を、点心を味わう經験に喩える。詩歌を「點心」に喩える、極めてユーモアに富んだ表現である。このような批評は、如亭に先んじて、宋代の楊萬

里「讀詩」にも見える。

不是老夫朝不食　是れ老夫　朝に食らわざるにあらず

半山絶句當朝餐　半山の絶句　朝餐に當つ(注25)

楊萬里は王安石（號は半山）の詩句を朝餐に喩えている。

以上に見たように、『詩本草』における飲食の比喩は、中國における詩味説、特に宋代に隆盛した「以食喩詩」と基本的に方向を同じくするものと考えてよく、如亭における中國詩歌の受容を端的に表わすものと言えるだろう。

五　結語

以上、本稿は江戸後期の柏木如亭における中國詩學の受容について、『詩本草』を中心に檢討した。本書において如亭は、中國とりわけ唐宋の詩人たちの成果を吸収し、それを飲食という極めて日常的な題材を通して表現することにより、江戸の漢詩に新たな境地を切り拓いていった。柏木如亭の詩、延いては江戸後期における詩壇について理解するうえで『詩本草』は極めて重要な資料と言えよう。

注

（1）富士川英郎『江戸後期の詩人たち』、平凡社、二〇一二年、第八五頁。

（2）新谷雅樹「『詩本草』と柏木如亭」（『藝文研究』五十四號、一九八九年三月）。同氏「山下徹氏藏寫本『如亭先生詩本草』について」（『神奈川縣立外語短期大學紀要』總合篇第三十號、二〇〇七年）。柏崎順子「再刻本『詩本草』と澤宗次郎・水原芝」（『書誌學月報』四十七號、一九九一年十二月）。上野日出刀「柏木如亭と梁川星巖」（『活水學院日本文學會』第二十二號、一九九一年）。中島貴奈「柏木如亭詩論――『清新』の法」（『國語國文』第一二號、中央圖書出版社、一九九九年）。新稻法子「『詩本草』考」（『語文』六十七輯、一九九七年二月）。任穎「柏木如亭『詩本草』の『魚』に關する表現」（『比較文化研究』第一一四號二〇一四年）。揖斐高『游人の抒情――柏木如亭』（岩波書店、二〇〇〇年）。同氏編『柏木如亭集』（『柏木如亭年譜考証』、覆製『木工集』『譯注聯珠詩格』『如亭山人稿初集』『詩本草』『如亭山人遺稿』）、以下の引用はこれらを底本とし、同氏校注『詩本草』（岩波書店、二〇〇六年）と『柏木如亭年譜考証』を適宜參照した。

（3）大窪詩佛『詩聖堂詩集』初編卷七（富士川英郎、松下忠、

佐野正巳編『日本漢詩』（詩集）第八巻、汲古書院刊）。

（4）梁川星巖『星巖集』甲集巻二（『日本漢詩』（詩集）第十五巻）。

（5）唐・李商隠「李賀小傳」（『全唐文』巻七八〇、吉林文史出版社、二〇〇〇年、第十四冊、第九二九七頁）に「恒從小奚奴騎距驢、背一古破錦囊、遇有所得、卽書投囊中」とある。

（6）後唐・馮贄編『雲仙散錄』（中華書局、一九九八年、第五三頁）に『金門歲節』の話を引き、「賈島常以歲除、取一年所得詩、祭以酒脯、曰『勞吾精神、以是補之』」とある。

（7）中国の詩論の一つ。公安派三袁（袁宗道、袁宏道、袁中道）に提唱され、更に清代の袁枚によって展開された。後七子の李攀龍や王世貞の模擬の風を批判し、詩人の眞情を尊重して自然な表現と獨創性を重んじる。

（8）市河寛齋編『隨園詩鈔』（長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』補編、二十輯、汲古書院）に大窪詩佛の序文を參照。

（9）嚴紹璗「漢籍的東傳與文化的對話」、『中國典籍與文化』、二〇一二年第一期。

（10）頼山陽『山陽先生遺稿』詩巻二（『日本漢詩』（詩集）第十巻）。

（11）『初集』の首句は「荏城人世極樂國」、「荏城」と「江都」は皆江戸（現東京）を指す。

（12）唐・杜牧『樊川文集』巻四、『四部叢刊』景明翻宋本。

（13）孔凡禮點校『蘇軾文集』巻一一（中華書局、一九八六年、第一冊、第三四九頁）を參照。鳳翔府通判在任時、蘇軾は旱魃のなか久しぶりの降雨を大いに喜び、建てたばかりの亭を「喜雨亭」と名付けた。

（14）揖斐高校注『詩本草』、第一二～一三頁。

（15）揖斐高校注『詩本草』、第一五七頁。

（16）例えば、蘇軾「於潛僧緑筠軒」（清・馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』巻九、上海古籍出版社、二〇〇一年、第一冊、第四二五～四二六頁）に「可使食無肉、不可居無竹。無肉令人瘦、無竹令人俗。人瘦尚可肥、士俗不可醫」（石刻を參照）、「書鄢陵王主簿所畫折枝二首」其の一（『蘇軾詩集合注』巻二九、第四冊、第一四三七頁）に「詩畫本一律、天工與清新」とあり、清新を重視し、俗を退ける主張を持っている。また、「熟讀」について、中国古くから「讀書百遍、其意自見」の諺があり、それを踏まえて、蘇軾は「送安惇秀才失解西歸」（『蘇軾詩集合注』巻六、第一冊、第二二一頁）に「舊書不厭百回讀、熟讀深思子自知」と言い、落第した秀才安惇を慰めている。

（17）例えば、宋代の胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻二六（人民文學出版社、一九六二年、第一七六頁）に引かれた陳師道『後山詩話』に「閩士有好詩者、不用陳語常談。寫投梅聖**俞**、答書曰『子詩誠工、但未能以故爲新、以俗爲雅爾』」という話がある。梅堯臣は閩士が作った詩が「陳語常談」を用いないことを批判し、「以故爲新、以俗爲雅」を主張している。彼自身は虱や蚤、カラスが蛆を啄む等しばしば卑近な事物を詩に引

き、俗語表現を用いて「捫蝨得蚤」「秀叔頭蝨」「八月九日晨興如廁有鴉啄蛆」のような詩をたくさん作っている。その後、蘇軾「題柳子厚詩二首」其二（『蘇軾文集』巻六七、第五冊、第二一〇九頁）には「用事當以故爲新、以俗爲雅」とある。また、蘇門の黄庭堅「再次韻（楊明叔）」引（劉尚榮校點『黄庭堅詩集注』巻一二、中華書局、二〇〇三年、第二冊、第四四一頁）に「蓋以俗**为**雅、以故爲新、百戰百勝、如孫呉之兵」と述べている。これらに類する發言は宋代に極めて数多く見られる。

(18) 高岡秀成『木工集』序に「集舊三百餘首、其前作未及變調者、悉刪去、纔存五十一首、蓋其意在精、而不在多也」、葛西因是『初集』序に「自乙卯至丙寅、凡十二年所得詩千余首、山人刪其不中繩墨者、得一百首、題曰『如亭山人初集』」とある。

(19)『詩本草』第三十一段の「魚の塩漬け」に「答剌如嬌妻、失熇弼吉如艷妾、肸蔑乙鼈失如俊婢、屋吉貲達乙如名妓、骨達乙則如千金小姐、可愛而不可狎也。答剌昊魚也。失熇弼吉松魚也。肸蔑乙鼈失海鰛也。屋吉貲達乙方頭魚也。骨達乙棘鬣魚也。皆是鹽藏名品、他州不能及者」とある。「答剌」、「失熇弼吉」、「肸蔑乙鼈失」、「屋吉貲達乙」、「骨達乙」は、それぞれ鱈（たら）、塩引鮭（しおびきざけ）、姫鰯（ひめいわし）、興津鯛（おきつだい）、小鯛（こだい）の漢字音である。

(20)『詩本草』第四十三段の「水族」に「溪上幽居亦有時新魚菜逐春廻至。擷于山之外、遇着種種水族、亦足以膳己饗賓矣。戴玄玉寶冠披爛金錦袍者、尖頭細身著蒼衣者、巨口大腹皂巾皂服者、一身溫潤白衣白裳者、霜冠而雪袍者、花面而彩衣者、短軀環眼黄盔黄甲持三尖刀者、長頸深目手足肥大穿綠銅圓鎧者、短小精悍衣斑衣者、首平腮濶腕粗腳笨掛茶褐色團花戰袍者、撥刺奮躍、每日來吾廚下、聽割烹法令、方饞腸清福時也」とある。

(21) 清・袁枚『隨園詩話』巻一二（人民文學出版社、一九六〇年、第四一三頁）に「孫興公說高輔佐『如白地光明錦、裁爲負版袴、雖邊幅頗濶、而全乏剪裁』。宋詩話云『郭功甫如二十四味大排筵席、非不華侈、而求其適口者少矣』。一以衣喩文、一以食喩詩、作者俱當錄之座右」とある。

(22)『蘇軾詩集合注』巻二一、第三冊、第一〇八六頁。

(23) 宋・晁補之『濟北晁先生雞肋集』巻四、『四部叢刊』景明本。

(24) 蘇軾「書黄子思詩集後」（『蘇軾文集』巻六七、第五冊、第二一二四頁）を參照。

(25) 宋・楊万里『誠齋集』巻三一、『四部叢刊』景宋寫本。